

---

# イセカイ建設株式会社！

大谷郁都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イセカイ建設株式会社！

### 【Nコード】

N0408L

### 【作者名】

大谷郁都

### 【あらすじ】

ヘタレにさらに輪をかけてヘタレな由匡（20歳、ちなみに独身の家に偶然入っていた「ヒノモト建設株式会社社員募集！」のチラシ。そのあまりに都合のよい文に、由匡は興味本位に会社を覗きに行く。しかし、勘違いで社内に連れられてしまい、そのまま社員となるハメに！！そして、ヒノモト建設株式会社という組織の正体は！？ギャグありシリアスありなんでもありファンタジー！！

## プロローグ：億載一遇（前書き）

恋愛要素はほとんどといっていいほどありません！ご了承ください。  
あと富山弁全開です。フル活用！！

## プロローグ：億載一遇

芥川由匡あくたがわよしまさのこの始まりは二週間前。富山県田舎者代表とも言い切れる由匡は、昔高校の先生が言っていた

「このなかの三分の二のやつが富山からでていくんやろなあ〜」  
という言葉を勝手に目標にし、そして、20になった今、ついに実行しようとして決意していた。

が、しかし

残念ながら、彼はヘタレにさらに輪をぐるぐる巻きぐらひにかけたヘタレだった。ちなみに二週間前に東京に上京し、都会の荒波に負け上京二日目に富山の家に泣いて帰ってきている。富山で職業安定所を梯子するもヘタレな彼には他人と一対一で話すこともままならず、ましてや面接なんてもってのほかなのでそのまま職は決まらず、ずるずると時を引きずって一週間前の朝。ちなみに自宅である。

「由匡、あんたちよつと新聞とつてきてくれんけ」

「ん？いいよ、ちよつとまっとなつてー」

由匡は、台所から届いた母、由子よしこの声に答えながら窓から上半身を出し、ポストに刺さっている新聞を抜き取った。しかし思いのほか新聞は重く、中からバサバサとチラシが落ち地面に重なっていった。

「あつ、」

「やつぱりね……」

由匡がおもわず上げた声に、由子がため息を漏らした。

「ほら、お父さん達おきて来るから早く取ってきて」

由子がせかすように言った言葉に背中を押され、由匡はよろけながらも外へ飛び出す。

「あゝあ。ぐじゃぐじゃだよ……ん？なにこれ」

幾重にも折り重なったチラシの中に、ひとつだけ黒く塗りつぶされ

ていたチラシが見えた。由匡は不審に思いながらもそれをかがんで拾い上げ、白抜きされた文字を読み上げる。

「『どうもこんにちは！このチラシを手にとつて下さり、ありがとうございます。ヒノモト建設株式会社（以下当社）では社員を募集しています。どんな年齢、性格、体格の方でも大歓迎！時給2000円です！詳しくはこちらにお電話ください』・・・変なチラシ。つてか体格って関係あるんけ」

そっくりつつも、そのふざけた文面の一部に由匡は目を奪われていた。

「時給・・・2000円・・・」

「なんだよお前。やってみたけりややりやいいじゃねーか」

背後から突然かかった声に、由匡は肩を上げ、「うわあ！」と大きく叫んだ。その声に、庭の木にとまっていた鳥がバサバサと羽音を残して飛び去っていく。

「げっ、匡都まさとにいちゃん！」

「げつてお前・・・イマドキこんな時給たけえほうねえぞー。ちよつとは勇氣出してみたらどーだよ」

匡都は由匡を無視してそうまくしたてると、父ちゃん起きてっぞ、とだけ残して家の中へ入っていった。

「・・・じゃあ、やってみよつかな・・・」

由匡が呟いたその言葉は、兄に届くことはなく、自分の中で幾度も反響していた。自信なさげに垂れている手に、黒のチラシを握り締め。

兄が思ったのは由匡の足元にあるチラシであり。

由匡が思ったのは黒のチラシであり。

二人がその違いに気づくことは、生涯きつとないだろう

(由匡は製鉄工業したかったんか) (株式会社なんて大きなほう初めてだな)

## プロローグ：億載一遇（後書き）

この小説のキャラなどのイメージは私のサイトにおくことにしました。後ほどURLをのせられたらいいなと思っています。



## Mission: 受話器前での奮闘戦。 ってほどでもないけど。

「どわああああー！ やっぱ無理だよ！！ 助けて兄ちゃん！」

由匡よしまさ本日30回目の同じ台詞に、兄、匡都まさこは大きなため息をついた。由匡は今、例のチラシ（お互いで食い違っている）に載っていた電話番号に電話をかけようとしているのだが、最後の番号を押そうとしないのだ。どんな仕事でも毎回このパターンなのだが、今日はいつになくしつこ・・・丁寧に言っていると、びくびくしている。匡都は内心「いい加減にしろよゴルア」と怒鳴ってやるうかと思っっているのだが、きつと「怒鳴る 由匡が泣く 電話しない やっぱ無理無職でいいよ僕」のループだと色んな経験上分かっていたので、怒鳴らない方法はないものかと頭の回線を活用する。そして一言。

「電話、かしてみ」

「はい？」

匡都は由匡から受話器をもぎ取ると、「番号読み上げろ」といって催促する。由匡は慌ててチラシに目を移すと、匡都を怪訝そうにちらちら見ながら番号を読み上げていった。すべての番号を押し終わると、由匡の耳に「ほらよ」と受話器を押し付けた。

「うっ」

由匡は「やっぱりね」とあきらめ気味にそういうと、受話器から届く呼び出し音に聴覚を集中させる。コール音はあるのだが、あちらが電話に出そうな雰囲気は全くない。そして、こっ長く続くと不安というものはつのるものである。

やはりというべきか、由匡は目をかたく閉じると、受話器を耳からはなした。

「あ、おいバカ」

匡都がすばやく受話器を引っつかんでまた耳に押し当てると、由匡の顔がますます青ざめていく。

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理！！」

「大丈夫だ！この電話に出れば明るい明日がまつてるぞ！……  
・多分」

「いやああああああ絶対いつてもクビだよこれえええええだ  
つて電話でてくんないもん！でる気ないよ絶対コレ！」

「お前つて否定的になるとよく喋るよな」

「気にしないで！」

受話器の前でぎゃあぎゃああと叫ぶ兄弟を、妹が顔をしかめて見る。  
とめようと口を開いたが、聞かない（特に由匡が）ことは重々承知  
なので、見ていた雑誌に再び目を移す。

「ふぬぬぬぬぬっ！はーなーしーてー！」

由匡が異様に粘る。しかしその1.5倍の強さで匡都が粘り返す。  
しかし、匡都の手は限界だった。いつもは由匡に負けることはない  
のだが、由匡が相当粘ったらしい。受話器は匡都の手をすっぱ抜け、  
由匡の手に収まる。そして

ガッチャン

「あ？」

匡都は、誰もいない廊下を一人息を荒くし立っていた。足元には、なにもかいてない真っ白なチラシがぐしゃぐしゃになって落ちていく。飲み込めない状況に、匡都は一人立ち尽くす。

そして、

「なんでオレ一人で息が荒いんだ・・・え？オレって変態なのか？え？教えてくれ匡観まのみ！！！」

「うおっいった！知らないわよ！電話の前で一人でドタドタしたのは兄ちゃんでしょ！あとお兄ちゃんの変態だよ！」

まるで由匡がいないように振舞い、妹さえも由匡がいないように会話をしている。

というか、由匡という人物なんて最初からいないのだ。

彼らの頭に、由匡という性格。顔。単語。そういうった類のものは、いっさいなかったのだ。

最初から、いないんだ。

「え？」

由匡はぱちくりと目を瞬いた。ふかふかのソファが、体を包む。と  
いうか、ろ、廊下にいたはずんだけど！

由匡はこれを夢と断定して、瞬いた。

「やつ！君つてずいぶん若いねえ。何歳？」

そして、その希望は打ち砕かれたのだった。

M i s s i o n : : 受話器前での奮闘戦。 ってほどでもないけど。(後書き)

起承転結の起なのになしてこんなにながんだろう・・・!!  
あ!!ここまで読み進めてくださりありがとうございます!!これか  
らももっさり続き書いていきたいと思えます!!どうかこれからも  
よろしく願います!!誤字脱字あったらすぐさまお知らせ下さい  
!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0408/>

---

イセカイ建設株式会社！

2010年10月14日13時31分発行